東北家庭科教育研究　No.2 pp. 29-37　(2003.6)

現代の育児行動
—母性的行動を阻害する要因について—

武田京子[*1]，森田恵理[*2]

(*1 岩手大学教育学部，　*2 岩手大学教育学部小学校教員養成課程)

The Child-care Behavior of Today
- About the Suffocative of Maternal Behavior -

*1 Kyoko TAKEDA , *The Faculty of Education, Iwate University*
*2 Eri MORITA , *The Faculty of Education, Iwate University*

Ⅰ．目的

「少なく生んで，良い子に育てたい」多くの親がこのように願った結果，わが国は「結婚して子どもを持つなら2人」という少子化が定着した。高度経済成長はすでに過去のものとなり，景気は低迷しているとはいうものの，豊かさ・便利さを追求してきた産業社会は，物質文明の進歩をもたらし，清潔で衛生的な快適な生活をもたらした。特に経済面では，物があふれ．お金さえ出せばなんでも手に入るようになった。週休2日制の定着によって時間的にもゆとりが生じた。しかし，これらのゆとりが人々に真の意味でのゆとりをもたらしているかどうかは疑問視されている。子育てにおいて，子どもの数が少なく，経済・時間のゆとりがあれば，ゆとりのある育児ができそうであるが，母親による児童虐待の増加，日常的な世話ができないほど子育てに不安を感じる，育児不安の増加などが報道され，子育てがうまくできていない状況が指摘されている。従来，あたりまえとして行われていた子育てが大きく変化してきているのである。

大日向は，6,000名の母親を対象に調査を行い，「子育てをつらく思うことがある」「子どもをかわいく思えないことがある」と回答した人が8割，9割あり，その時どうしているかという質問へは，「『あんたなんか嫌い』といってしまう」「いらいらして手を上げてしまう」と3割から5割の母親が答えている[1)]。子育てはすばらしい生きがいを感ずることのできる営みであり，母親ならば皆，子どもをかわいいと感じていると一般的に思われているが，大日向の調査結果からは，異なった母親像が見えてくる。

子どもに対する虐待はマスコミのショッキングな報道ばかりでなく，児童相談所への相談件数も年を追うにつれて増加してきている．平成12年度，全国174の児童相談所で受けた相談件数は，362,655件であり，児童虐待件数は，17,725件で前年の1.5倍に増加している。平成12年に「児童虐待防止等に関する法律」が施行され，相談や通告が増加したことによるものだが，表面化していない虐待が存在していることも考えられる。平成12年度の主たる虐待者は，実父23.7%，実母61.1%である．実母の割合は平成10年度55. 1%，平成11年度58.0%と増加している。(資料：厚生労働省大臣官房統計情報部「社会福祉行政業務報告」)[2)]

(受付2003年3月4日／審査終了2003年4月21日)
〒020-8550　岩手県盛岡市上田3-18-33

また,「公園デビュー」「お受験ママ」という言葉が生まれる背景には，少なく生んで大切に子どもを育てたいという想いや周囲の子どもたちと自分の子どもを比較して一喜一憂する母親の姿が見えてくる。少子化社会の中では，性別や血縁にこだわらず，後から生まれてくる子ども達を健全に育てる力として，「次世代育成力」という言葉が使われることがある。核家族家庭の子育ては両親が協力して行うものであり，養育行動は母親がすべきものでもなく父親の方が優れている場合もあり，「親性」「養護性」という言葉が使われることもある。しかし，性別役割分業観のため母親にその責任が集中している。女性の高学歴・社会進出など社会状況が大きく変化してきている中で，母親になったとたん母親役割を取れないことを育児能力の低下，母性の喪失とするのは疑問である。

本研究では，このような現代の母親がおかれている育児環境や育児の実態を明らかにし，母親が生来持っている育児能力の成熟と促進のために何が必要かを明らかにする。

II．現代社会における母性 (註)

男女共同参画型社会が推進され，父親の育児参加があたりまえのことなり，子育ては母親の責任であるという考え方は，過去のものとなりつつある。しかし，実際面では専業主婦のいる家庭に限らず，共働き家庭においても母親であり主婦である女性に子育てや家事の責任と実務が負わされている。子育てに関していえば，1992年から施行された「育児休業制度」は民間の労働者，公務員等すべての職種についている母親と父親に子どもが満一歳になるまでどちらか一方に休業を認める制度である。しかし，育児休業を取る父親は2001年において全体の2．4%に過ぎない。子ども未来財団が2002年に行った意識調査では，30代の男性に育児休業制度を肯定的に受け取る男性が多く見られたが，実際に自分が取得するかという問題になると，むずかしいと回答している。頭の中では「男も女も，仕事も家事・育児も」と考えていても，周囲には「育児は母親の手で」「3歳までは母親の手で育てるのが望ましい」というような母性神話や三歳児神話がかなり強く残っている。

母性という言葉は，ドイツ語のMutters halt，英語のMotherhoodの翻訳語として生まれたものである。大正時代，与謝野晶子と平塚らいてうらによって繰り広げられた，母性保護論争の際に広まり定着したものである。それ以前は「母態」「母権」という言葉が使われていた。

母性には,母性生得説と母性学習説の二つの考え方がある。前者は，母性本能という言葉が存在するように，女性が生まれながらに持つ母親としての性質である，という考え方である。後者は，母性は生得的なものではなく，学習していくものである，という考え方である。ここではそれらの説について深入りはしない。どちらの説を採るにしても現代社会の中で,生得的な母性が崩壊または喪失してしまい育児能力が低下しているか，母性習得の学習がうまくいかないための未発達・不全感から育児能力が低下していると考えられる。

III．母性喪失・母性未発達の要因

1．母性を育てる母子相互作用

林道義は，「『密着育児』『密室育児』が虐待の原因だという説は間違っている。『密着育児』といわれている場合のほとんどは，母子の密着がないのである。むしろ正しい密着がないからこそ育児がうまくいかないのである。正しい密着とはスキンシップ，心理的なアタッチメント，適切なコミュニケーションである。」[3] と述べている。スキンシップ(和製語　skin＋ship)　は，親子間などの肌と肌のふれあいによる心の交流のことである。赤ちゃんが泣いたとき，まず，抱き上げて様子を見る，授乳をするなどの行為を通じてお互いの体温を感じ，においなどを感じ取ることによって形成される。

アタッチメント（attachment）は，特定の人に対する心理的な結びつきである。乳児が母親の後追いをする行動などに見られる強い結びつきをいう，愛着ともいう。母親からの子どもへの愛着形成という側面を母性の感受という言い表し方をする場

(註)　本論文で使用する「母性」という言葉は，『母性神話』『母性本能』に代表されるような，女性と結びついた育児能力という意味で使用するのではない。調査対象を養育者が全員母親だったため，母親の養育性という意味で「母性」を用いた。

合もある。

コミュニケーション（communication）は，人間がお互いに意思・感情・思考を伝達しあうことである。言語・文字その他，視覚・聴覚に訴えるみぶり・表情・声などの手段によって行う。胎児のときから聴覚は機能し，体内で聞いた音を記憶しているという。乳児のコミュニケーション手段である泣き声によって，母親は乳房の血液循環量が増加するなど反応を起こす。乳児は，人間の眼に強い関心を示し，じっと見つめると見つめ返す（アイコンタクト）。

触覚を手段として行うスキンシップと言葉や表情，アイコンタクトなどの聴覚や視覚を用いるコミュニケーションが正常に行われることによって，母子相互間に信頼関係・アタッチメントが形成されるのである。

2. 母性的行動を阻害する事柄として考えられるもの

親役割を獲得する前に，子どもが成長する様子を学習したり，子どもと接触する経験の機会が減少している。母性の発揮や学習の機会が阻害されることにより，健全な母子相互作用が行われず，さらに母性の発揮が阻害されるという悪循環が生じてきている。拡大家族を形成し家族が協力して暮らしていた時代には，親子間のスキンシップやコミュニケーションは豊かに行われていたという。しかし，現代社会の中では，母性的行動を代表するスキンシップやコミュニケーションは意識してとろうとしなければ成立しにくいものになっている。その背景にはどのような事柄が考えられるであろうか。(図 1)

①ゆとりの増加

物理的，経済的，時間的なゆとりは，母子相互作用の形成を保障する要因と考えられるが，行過ぎた場合は逆に作用する。家事の合理化で子どもと一緒にいる時間が増えるが，核家族化，父親の育児不参加の状況では，母親は孤立する。また，育児の軽減を目的に様々な育児用品が普及している。代表的な例は紙おむつだが，洗濯の手間とおむつ交換の回数を軽減したが，その結果おむつ交換の際に行われるスキンシップやコミュニケーション形成機会の喪失につながっている。わが国の伝統的な育児技術であるおんぶや添い寝なども減少し，ベビーバスケット，ベビーカー，ベビーベットが代わりに使用され，これもスキンシップやコミュニケーション形成機会の喪失につながる。

②人間関係の希薄化

核家族化，少子化，近所づきあいの減少，母親の就労による保育施設の利用などが母子間ばかりでなく様々な人間関係を希薄なものにしている。核家族化と少子化の進行は世代間の育児知識伝授の機会を減少させ，少子化によるきょうだい数の減少は家庭内や地域で幼い子どもに接する経験を減少させた。近所づきあいの減少は，子ども同士の接触の機会ばかりでなく，親同士の接触や年長者から助言を受ける機会を減少させている。

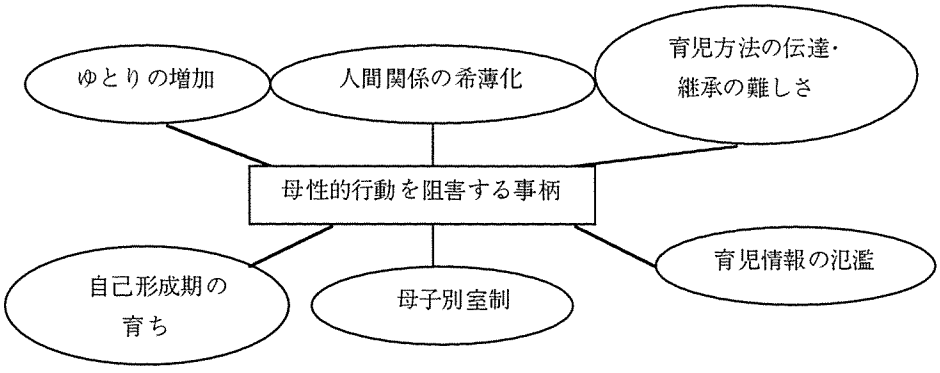

図１　母性的行動を阻害する事柄

子育ては本能的な部分もあるが，直接・間接的に乳幼児を見聞きし学習する必要もある。抱き方がわからないから抱かない，言葉は自然と覚えるものだから話し掛けないという親が増加し，アタッチメントがうまく形成できなくなっている。

女性の高学歴化が進み，出産後も仕事を継続する女性が増えている。政府は少子化の歯止めとしてエンゼルプランを実施し，就労している母親の子育て支援を進めている。育児休業制度活用後就労する母親の対しての保育施設の充実を図っている。

③育児方法伝達継承のむずかしさ

第二次大戦後，従来の赤ちゃんがほしがったときにはいつでも母乳を与え，添い寝をすることに代表される伝統的な日本式育児法とは異なる，科学的育児方法が紹介された。時間を決め，理想的な栄養が配合されている人工乳を与える，親子のつながりよりも夫婦のつながりを重視する，子どもの寝室は別にし夜間の授乳はしない，わがままにしない，抱き癖をつけないなどの子どもの早期自立を促す育児方法である。戦後の日本では，戦勝国の科学的な育児方法として信奉され普及した。現在の祖母になっている世代はこの科学的育児方法を実行してきた世代であり，同居の場合に相談をすると科学的育児方法を薦められる。科学的育児方法がすべてアタッチメント形成を阻害するわけではないが，戦後の混乱期に伝統的な育児文化を否定した後に日本的育児方法や母乳哺育が再評価されるなどの経緯もあり，育児方法の伝達・継承のぐらつきなどがアタッチメント形成を妨げる危険性がある。

④自己形成期の育ち

母性的な行動は，子ども時代の育てられ方からも影響を受ける。児童虐待の場合虐待を行う親のほとんどは，自分自身が子どものときに虐待を受けた経験者であるという。自己形成期に自分の育てられ方をどのように受け止め評価していたかは，親世代になったときの育児行動の原点に位置づくものである。

⑤母子別室制

新生児室に収容し衛生的に管理し新生児の死亡率を下げる，という方式は③の科学的な育児方法と同様に第二次大戦後導入された。戦後のベビーブーム期には母子同室制より少ない看護要員ですむ，新生児の異常の発見が早い，面会者からの感染を防ぐなどの理由からほとんどの産科病院で別室が採用され，管理的な出産が行われた。わが国では，従来，出産は産婦の実家内で行われ，母子同室・同床であった。別室制の採用は母子死亡率の低下に貢献したが，母乳哺育の促進，母性の成熟，日常的な世話の学習の面では逆効果になった。出生直後から泣く，むずがるなどのサインを出しているにもかかわらず，気づかずに対応してもらえないと赤ちゃんは自分の要求を表出しなくなり，コミュニケーションの学習に支障をきたすようになる。

⑥育児情報の氾濫

科学的育児方法の導入によって，従来の伝統的育児法は古いものとして論外視された。1960年代には育児書ブームが起こり，育児雑誌も創刊され育児情報は活字から取得するものになった。母から娘または嫁へという人を通して伝えられる育児情報では時代の変化に対応できない，という事情や高学歴化による活字に対する強い信頼感もこれに拍車をかけた。

育児書が家庭に普及した1960年代後半にはすでに育児書に頼りすぎ，赤ちゃんが発する信号を受け止めことができなくなり親子の相互交流が深められなくなっていること，方法や技術に頼りすぎ世話をするときに技術レベルに追われて，真の感情の交流がなおざりにされていることなどの弊害が指摘されていた[4)]。

子育ては，機械の操作方法を習得することではない。子どもには人格があり様々な刺激を与えられ成長していく中でいろいろな反応をする。子どもから発せられる様々な信号を読み取り判断できるのは，一番近くにいる日常的な世話をしている人である。万人向きにかかれている育児書の回答がいつでも一人の子どもに当てはまるわけではないのに，たくさんの情報が氾濫する中で自分の子どもに自信をもって接することのできない母親が増加してきているのではないだろうか。

III．質問紙調査

1．調査

Ⅱ，に述べた母性的行動を阻害する要因を検証するために質問紙を作成し調査を行った。調査対象は現在1歳から3歳までの子どものいる母親約100名，調査時期は2002年10月から11月である。自記式質問紙によって行った(表1)。

表1　調査用紙の配布状況

		配布	回収	%	無効	有効	%
1歳6ヶ月検診		38	34	89.5	1	33	97.1
保育園	0歳児	10	10	100	0	10	100
	1歳児	21	21	100	0	21	100
	2歳児	4	4	100	0	4	100
未就園児	1歳児	8	8	100	0	8	100
	2歳児	11	11	100	0	11	100
その他		7	7	100	0	7	100
総計		99	95	96.0	1	94	100

調査内容は，対象者の家族形態等の概要，育児環境(12項目)，育児の実態(アタッチメント形成の自己評価23項目を5段階評価)である(表2)。

表2：調査内容

概要	家族形態・就労状況・子ども数・子ども性別・子ども年齢
育児環境	相談相手・育児の役割・愛着者・子育て観・育児情報・母子分離・母子同室・育児不安・情報による不安・祖父母との対立・母親の育ち・出産前の保育経験
育児の実態	母親の育児行動 子どもの様子

表3　調査対象者の概要

	種類		数
家族形態	拡大家族	夫方(祖父母)	10(11)
		夫(祖父)	1(1)
		夫(祖母)	5(5)
		妻(祖父母)	2(2)
	核家族		74(79)
	母子家庭		1(1)
	その他		1(1)
	計		94(100)
母親の就労形態	就労主婦	被雇用者	31(33)
		公務員	5(5)
		自営業	2(2)
		パート	6(6)
		アルバイト	3(3)
	専業主婦	専業主婦	46(49)
		休職中	1(1)
	計		94(100)
性別	男児		46(49)
	女児		48(51)
	計		94(100)
対象児の年齢	0歳		5(5)
	1歳		61(65)
	2歳		24(26)
	3歳		4(4)
	計		94(100)
きょうだい数	1人		57(61)
	2人		32(34)
	3人		5(5)
	計		94(100)

2. 結果

①調査対象者の概要は表3に示したとおりである。

②育児環境

1) 育児の相談相手

子育ての相談相手として，義父，義母，父，母，夫，友人，近所の人，その他から3名以内で選択し順位を記入してもらった。相談相手のいない人は無く，高い順に夫(30%)，母(25%)，友人(22%)，義

母(9%)，その他(8%)，義父(3%)，近所の人(3%)であった。3位までに選ばれた人をトータルで見ると夫が86%，母72%，義母26%であった。

2）育児行動の役割(表4)

父親が参加する育児行動で最も高いのは入浴であった。しかし，入浴そのものを父親が行い，風呂から上がった後の着衣は母親が行うという連繋した参加の仕方が考えられる。授乳，離乳食の調理・与え，寝かしつけは母親の役割であった。

全項目の最頻値を求め，主たる育児行動者を決定した。69%が母親，31%が父親と母親の両方であった。

表4　育児行動の分担

	父親	母親	両方	その他
授乳	0	85	8	1
離乳食調理	0	90	2	2
離乳食を与え	1	63	28	2
入浴	25	35	34	0
寝かしつけ	1	74	19	0
オシメ交換	0	54	39	1
あやす	2	55	37	0
屋内遊び	2	45	45	2
屋外遊び	8	45	39	2
家事全般	1	80	11	2
しつけ	1	43	49	1

3）主な養育者

主な養育者は母親(87%)であった。前問中の寝かしつけを母親とするものが79%であったことから見ても，母親との愛着によって安心して子どもは眠りにつけることがわかる。

4）子育て観

「愛情いっぱいに子どもに接し，いつまでも暖かい眼で見守っていく」47%，「小さいうちは充分甘えさせ，次第に自立できるように子どもを促す」43%，「子どもがいくつになっても，強い愛情をかけ支えていく」7%，の順であった。対象時の年齢が低かったため「早く自立できるように小さいうちから厳しく育てる」を選択する人はいなかった。

5）育児の情報源（表5）

友人と育児書・育児雑誌が情報源の約半数となる。対象者が核家族の占める割合が高く，手近かな手段がとられている。

表5　育児情報源

	1番目	2番目	3番目	しない
育児書・育児雑誌	26	19	20	29
義父	0	0	0	0
義母	3	9	3	79
父	0	5	1	88
母	27	13	9	45
友人	21	24	25	24
夫	4	6	6	78
近所の人	1	4	4	85
インターネット	3	3	4	84
子育てサークル	1	5	5	83
その他	8	6	5	75

6）子どもと離れる時間の有無，預け先，影響

就労に関係なく定期的に子どもとはなれる時間を持つ人は全体の54%で，預け先は保育施設59%，祖父母16%であった。子どもとはなれる時間を持つことによって，「二人きりで常に一緒にいるよりは，気持ちに余裕を持って子どもと接することができ，関係がよくなっている」49%，「子どもにさびしい思いをさせるが，その分一緒に過ごす時間を大切にするようにしている」43%である。

母親は子どもと離れる時間を持つことによって，反省も含めた気分の切り替えの機会となり，子どもとの良い関係作りに有効に働く様子がうかがえる。

7）母子同室，別室の実態と評価

「24時間以内に同室」33%，「48時間以内に同室」26%，「3日以内に同室」24%，「4日以内の同室」3%であり「母子で別室」は6%であった。いまや母子別室は過去のものになり，母親の体力と新生児の

表6　育児の実態に関する母親の自己評価

項目No	内　　容	よくあてはまる		だいたいあてはまる		どちらともいえない		あまりあてはまらない		全くあてはまらない	
		人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
15-1	不安やイライラする事がある	10	11	22	23	31	33	28	30	3	3
15-2	育児書・育児雑誌を読んで不安になったことがある	4	4	13	14	20	21	26	28	31	33
15-3	祖父母と育児観の違いで対立する事がある	4	4	11	12	23	24	36	38	20	21
15-4	子どもの時愛情をかけて育てられた	38	40	32	34	17	18	6	6	1	1
15-5	出産するまでに子どもを抱く機会に恵まれていた	20	21	18	19	12	13	25	27	19	20
15-6	授乳時，きちんと抱いている	64	68	25	27	3	3	1	1	1	1
15-7	授乳時，話し掛けたり，発語や表情に応えている	46	49	34	36	10	11	4	4	0	0
15-8	授乳中，赤ちゃんを見つめながらあげている	42	45	38	40	11	12	2	2	1	1
15-9	オムツ換えのとき何度か目を合わせている	41	44	42	45	8	9	3	3	0	0
15-10	オムツ換えのとき，話し掛けたり，発語や表情に応えている	42	45	48	51	3	3	1	1	0	0
15-11	入浴中，話し掛けたり，発語や表情に応えている	65	69	28	30	1	1	0	0	0	0
15-12	普段，頬ずりなど直接的なスキンシップを積極的に行う	70	74	23	24	1	1	0	0	0	0
15-13	赤ちゃんをおとなしくて育てやすいと感じる事があった	11	12	21	22	24	26	20	21	18	19
15-14	赤ちゃんが発声した時，繰り返したり，応えたりする	52	55	36	38	5	5	1	1	0	0
15-15	あやすと子どもはよく笑う	67	71	21	22	6	6	0	0	0	0
15-16	珍しいものを見つけると，指し，声を出して親に知らせようとする	72	77	14	15	6	6	1	1	1	1
15-17	視界に母親が入るとベビーベッドからのりだすようなことがあった	40	43	30	32	22	23	0	0	2	2
15-18	じっとみつめると見つめ返してくる	50	53	34	36	10	11	0	0	0	0
15-19	知らない人に会うと，不安を感じて泣いたり，警戒したりする	38	40	26	28	17	18	11	12	2	2
15-20	母親の後をはいはいなどで追うことがある	47	50	37	39	9	10	0	0	1	1
15-21	母親が見えなくなると泣いたり探したりする	48	51	33	35	7	7	5	5	1	1
15-22	朝起きて母親がいないと泣く	36	38	21	22	18	18	14	15	5	5
15-23	具合が悪いときに母親に擦り寄ってくる	55	59	22	23	11	12	4	4	2	2

状況を見て母子同室にするシステムが定着している。しかし，「愛情を感じるから母子同室が良い」51%,「母子同室が良いと思うが，ゆっくり休めないし，衛生面が心配」39%，積極的な肯定は約半数にとどまっている。

③育児の実態(表6)

1）母親の働きかけ

6から12及び14の質問項目がスキンシップ・コミュニケーションの自己評価である。ほとんどがきちんと行っていると評価している。入浴時の話し掛けは子どもとスキンシップの取れる貴重な時間であり，肌のふれあいに触発された言葉掛けが行われている。

2）子どもの様子

15から23の項目が子どもからのコミュニケーションの様子である。応答の状態を5段階評価でおこなった。

Ⅳ．考察

1. 母親の育児行動の自己評価と母性的行動を阻害する要因との関連

母親の働きかけ15－6から12及び14の5段階評価を得点として集計した後，標準偏差値をもとに自己評価の高い群と低い群に分け，母性的行動を阻害する要因とのクロス集計を行い，χ二乗検定を行った。統計的有意差が見られたのは以下の3項目である。

①「育児書・育児雑誌を読んで不安になった経験がある」は，自己評価の低い群に不安になった経験が多く統計的有意差（1%水準）がみられた。活字情報に頼りすぎ，方法や技術に頼ろうとすると実際の子どもの要求を見抜けなくなり，自己評価を下げることにつながったと考えられる。

②「出産後の母子別室制」は自己評価と統計的有意差(1%水準)が見られた。出産直後から同室にすることによって，子どもを自然に受け入れることができ，スキンシップやコミュニケーションなどの育児行動がスムースに取れるようになる。母性の感受期は出産後48時間以内にあるという報告の裏付けとも考えられる。

③自己形成期の育ちと自己評価は，自己評価の高い群は子ども時代に愛情をかけて育てられたと感じている(5%水準の有意差)ことがわかった(表7)。

表7　母性的行動を阻害する要因と育児の評価

母性的行動を阻害する要因	自己評価高群	自己評価低群
ゆとりの増加		
人間関係の希薄化		
科学的育児法		
自己形成期の育ち	*	
母子別室制		**
育児情報の氾濫		**

*p<0.05　**p<0.01

2. アタッチメント形成と育児行動の関連

子どもの様子15－15から15－23の5段階評価を点数化し標準偏差値をもとにアタッチメントの高低を定めた。母親の自己評価の高低とアタッチ

表8　アタッチメント形成と育児行動のクロス分析

母子外出時の抱っこ	
家族外出時の抱っこ	*
ぐずったとき抱き上げ	*
添い寝	
授乳時の抱き上げ	
授乳時の発語・表情への応答	***
授乳時のアイコンタクト	*
おむつ交換時のアイコンタクト	*
おむつ交換時の発語・表情への応答	*
入浴時の発語・表情への応答	*
普段の積極的なスキンシップ	
発声の繰り返し	

*p<0.05　** p <0.01　***p<0.001

メントの高低には統計的有意差が見られた（1%水準)(表8)。母親の育児行動における自己評価の高い群はアタッチメントも高い。つまり，スキンシップやコミュニケーションを行っている母親は，子どもの反応によってさらに育児行動を触発され，自分の育児行動に自信を持ち，高く評価するのである。

行動の程度によってアタッチメント形成に差が見られたものは，ぐずったときすぐに声をかけて抱き上げる，移動時の抱っこ，授乳･おむつ交換・入浴時のアイコンタクトや子どもの発語や表情への応答であった。特に入浴時は身体が解放的になり機嫌も良くなり,母子間の発語や表情の応答が増える。肌の直接的なふれあいが質の高いコミュニケーションを保障してくれる。このような日常的な抱っこ･話し掛け・表情の応答・アイコンタクトがアタッチメントを形成するのに有効である。

Ⅴ．結論

母性的行動を阻害すると考えられる事項は,「物理的･経済的･時間的ゆとりの取得」,「核家族化･少子化･近所づきあいの減少･就労母親の増加による人間関係の希薄化」,「育児方法の伝達･継承の難しさ」ではなく,「母子別室制」「育児情報の氾濫」「自己形成期の育ち方」であった。母子別室制は，出産時の事情によってやむを得ず別室になる場合もある。この時期に母子が接触時間を持たないと絶対に絆が結ばれず，子どもの成長に支障があるわけではない。より深い絆を結ぶためには早期の親密な接触が有効に働くのである。育児情報については,鵜呑みにせず,子どもの要求を読み取り情報を上手に活用する必要がある。

引用文献

1) 大日向雅美『子育てと出会うとき』日本放送出版協会　1999
2) 社会福祉法人　恩賜財団星愛育会　日本子ども家庭総合研究所編『日本子ども資料年鑑 2002』KTC 中央出版　2002
3) 林道義『母性の復権』中央公論社　1999
4) 木村栄・馬場謙一『母子癒着』有斐閣　1988